

氏 名 佐 藤 隆 宏  
所属学校 香川県立農業経営高等学校  
担当教科 農 業

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- ・ O D A を実際に現場でみて、国内でいろいろ言われている評価を自分の目で確認すること。
- ・ 青年海外協力隊のことをもっと良く知り、生徒に説明できるようになること。
- ・ 協力先の国々で、どの様に日本の金、物、人が役立っているか知ること。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

- ・ マレーシア、シンガポールでの教育の現状。
- ・ マレーシア農科大学では日本の大学と変わらない器材を見、また、研究内容もかなり進んだものでした。
- ・ サバ州造林技術開発訓練プロジェクトでは、日本がマレーシアやその他の東南アジア諸国へおこなってきた企業中心の開発ではなく、真にその国のことを考えた協力が行われていることを知りました。

### (2) 気になったこと

- ・ マレーシア、シンガポールを通じて、低学力の生徒、身障者、老人等社会的に疎外される立場にある人たちの生活や福祉はどうなっているのでしょうか。
- ・ 急速な工業化による害。(公害、ストレスなど)
- ・ 高級な技術をプロジェクト方式で効果的に移転していることはよくわかりましたが、その国にある在来の技術とのつながり、応用的な面での技術協力はどうなっているのでしょうか。

### 3. わが国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

どのプロジェクトも各方面で紹介して間違いなく反響が得られると思いますが。私が「農業」を担当している関係で、今回の視察地の中では、サバ州造林技術開発訓練プロジェクトが最も適していると思います。しかし、これは専門だからであって一概には言えないと思います。また、紹介するときにはVTRだけでなく、専門家の方々の話なども聴く機会があればと思います。また、国際協力事業団としては、ODAの活動をもっと知ってもらうようにすべきだと思います。

### 4. 今後の教育指導に活かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- ・香川県「農業教育」誌への研修紀行文の投稿。
- ・また、香川県の開発教育にも今まで以上に活動をしていこうと思っています。

### 5. 所感および意見

#### (1) 研修時期及び期間

夏期休業中でもあり良い時期と思われませんが、北の地方では2学期が始まっているとのことなので、8月前半の方がもっと良かったのではと思います。また、期間は適当と思います。

#### (2) 研修日程及び訪問先

日程については、もう少しゆっくりした方が良かったのではと思います。それにとまって、訪問先ももう少し減らしても良いと思います。

#### (3) その他全般的な所感

各県対応が色々であったようですが、休みを取って出かけた私のようなものがでないようにお考えいただけたら大変嬉しく思います。

## おわりに

今回の研修を通して大いに、国際教育の勉強になりました。JICAの前川さん、小沢さん、四国支部の石田参事さん、他のJICAの関係の方々、大変お世話になりました。この報告書を借りて、お礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。







## (3) 南米班 (ブラジル・パラグアイ) 日程

年月日	日 程		宿泊 (ホテル名等)
	午 前	午 後	
08. 21 (水)		19:00 東京発 (RG 831)	
08. 22 (木)		13:15 アスンシオン着 (RG 902) 16:00 JICA 事務所 打ち合わせ、概況説明	HOTEL UCHIYAMADA
08. 23 (金)	08:30 アスンシオン市養護学 校 10:00 ジャクロン地区花き栽 培協力隊員活動現場	15:30 ジャーガス病研究プロジ ェクト視察 17:00 人造りセンター	同 上
08. 24 (土)	08:30 アスンシオン市日本語 学校 10:30 イタイブ市仲森農場		同 上
08. 25 (日)		13:00 プラスガライプロジェクト 現場	HOTEL CASINO ACARAY
08. 26 (月)	07:30 ホテル発イグアス移住 地へ 08:30 イグアス事業所訪問 概況説明 09:30 日本語校視察 10:30 パラグアイ農業総合試 験場視察	14:30 イタイブダム見学	同 上
08. 27 (火)	08:00 ホテルチェックアウト 市内視察 09:00 通関手続フォス市へ (通関後は伯国時間 10 時) 11:00 イグアス滝見物	14:45 空港チェックイン 15:45 サンパウロ向け出発 17:30 サンパウロ着	ホテル パロン・ルー
08. 28 (水)	9:00 サンパウロ事務所 10:30 サンパウロ食糧供給セ ンター	13:30 日伯友好病院視察 15:30 アルジャ荒木克弥花卉園	同 上
08. 29 (木)	10:00 バンディランテス高校 見学	14:00 日本語普及センター 視察	同 上
08. 30 (金)			
08. 31 (土)			

氏 名 千 代 佐 敏  
所属学校 富山県立福野高等学校  
担当教科 農業

## 1. はじめに

今回の研修では、東京のJICA本部をはじめ、現地の事務所職員の皆様の一方ならぬご配慮をいただき、大変有意義な研修をさせていただきましたことにつきまして、心より御礼申し上げます。

ところでJICAの活動は、以前から機関誌「国際協力」や、中部支部長村越俊雄先生のご講演を通じて、僅かばかりの知識はあったものの、今回協力事業の現場に出向き、目で見、話を聞く事によってその活動精神の一端にふれることができ大変感動を受けました。

さて、私は以前から南米に大変関心を持っておりました。それは、富山県高等学校国際教育研究会が主催する夏期研修会に、毎年ゲストとして「富山県海外技術研修生・県費留学生」の参加をいただいております。その中でブラジルや南米諸国の研修生の方々とお話しを伺っているうち、赤い大地と、いろいろな人種が作り出す社会に興味を持ったからです。

また、私は大学時代「青年海外協力隊員」を志望したこともあり、果せなかった青春の夢の現場をこの目で見たいという希望もありました。

そこで

(1) 視察等に際して特に主眼をおいた点として

- ① 農業の様子(作目・土壌・流通)
- ② 青年海外協力隊員の活躍
- ③ 現地の生活の様子

に絞って研修の事前準備を行いました。

8月21日我々南米班3名は、大きなスーツケースと、それに入りきれない期待と不安をもって成田を出発致しました。丸一日以上飛行機に乗りパラグアイのアスンシオン空港に着いたころは少々疲れてはいましたが、市内へむけ



て走る車窓からは、赤い土とラパチョと呼ばれる黄色い花、貧しい民家にスペイン系の顔立ちをしたパラグアイ人が見えました。「ここが日本の裏側か、なんと町はゴチャゴチャしているな、でも美人の多い国だな」これが私のパラグアイの第一印象でした。

## 2. 我国の協力ぶりに感心したプロジェクト等

### (1) 青年海外協力隊員による海外協力( プラス ガライ プロジェクト )

パラグアイの首都アスンシオン市から、東へ約160 km離れたプラス ガライ地区にパラグアイ人の入植地がある。人口は7500人、世帯数は1300世帯で、作付は綿・サトウキビが中心である。ここでは国策として野菜を中心とした農産物輸出と、農家所得向上のためトマト・ピーマンなどの栽培を計画したが、その技術指導のためにJICAが普及教育センターと付属農場を兼ねた施設を1989年に設立した。

私が驚いたのは、この指導にあたる4名の青年海外協力隊員と1名のシニア協力隊員の活躍である。彼らは最小限の設備と資材で、付属農場に新しい作物を栽培し実証してその技術を、現地のパラグアイ人に普及しなくてはならない。また、その作物が市場で売れるまで指導を行う。日本の農業普及活動は、試験(農業試験場)・普及(農業改良普及所)・流通(農業協同組合)組織がそれぞれあり、連携をしながら行うが、ここではそのすべてを5名で行わなくてはならない。これは並大抵のことではない。さらにこのプロジェクトのカギを握るのは、農民の信頼である。そこで隊員は農家に下宿し、地域の行事に参加して現地社会と溶け込むために、体を張って努力している。私は海外青年協力隊員の姿をみて次の感想をもった。

- ① 協力活動は体力が基本である。  
何でも食べる強力な胃袋と、いつでも現場に飛び出す軽い腰
- ② 好奇心・協調性・根気の3Kが必要。  
現地にどうやって溶け込むか、そのあとどう活動を継続するか
- ③ ことばの壁は乗り越えなければならない。

スペイン語のほかにはグアラニー語（原住民の言語）のマスタ  
ター必要

(2) JICAイグアス事業所（日本人移住地事業所）

イグアス移住地は、ブラジルの国境の町エステ市の近くにあり、日本人が開いた農地と居住地あわせて87,763 ha、日系人192戸、パラグアイ人1120戸（小作人含む）日系人の平均土地所有面積は約200 ha、土壌はテラ・ロシヤと呼ばれる赤い土で、割合肥沃な土質である。栽培作目は入植当初は畜産主体で考えたが、資金がないため、現在は夏場は大豆、冬場は小麦の作付体系に変わった。

古山所長からお話を伺った中で特に印象に残ったのは「私達JICA事業所はこの移住地に農地を整備し、住居を区画し、道路をのぼし、学校をつくり、警察・裁判所・市役所などを誘致した。その他生活するためのすべての事業を行った。しかし、それを感謝する人は少ない。入植30年を迎え、これからはこの移住地の人達が自分の力で生きていくために、この事業所を数年後に閉鎖することになっている」また日本への出稼ぎ問題については「現在218名の出稼ぎ者がおり、こちらの大事な若い働き手がなくなり問題になっている、また日本でも生活習慣の違いでトラブルが起こっている」との事であった。パラグアイへ夢と希望を抱いて来た一世が逆にその息子や孫を日本へ見送る心境はどうだろうかとの話を伺いふと考えた。

この事業所の感想をまとめると

- |   |
|---|
| <p>① 移住地事業所は広範囲の事業を行う必要がある。<br/>金融、農地整備だけでなく、生活者の便宜をはかるためには総合的な日本の援助・協力が必要で、現地政府等の対応はルーズ</p> <p>② 日本人は海外移住者に対し理解が薄い。<br/>日本のマスコミは海外移住者の日本の出稼ぎについてのみ取り上げるが送り出した移住者の様子はほとんど伝えない</p> |
|---|

(3) 日本語学校(ブラジル、サンパウロ)

移住した日本人は、ひとかたまりの居住地をつくり生活することが多かった。そこでは両親から日本語を習っていたが、現地の学校で使われる言葉はポルトガル語である。次第に日本語の出来ない日系人が増えて来た。そこで、子供達に日本語を学ばせ日本の文化を教えたいという要望が高まり、日本語学校が設立された。

また最近では日本への出稼ぎ希望の日系人や、日本の進んだ技術を学びたいというブラジル人のために社会人学級も設けられている。

この教師は日本からの開発青年と呼ばれる人が当たっている。治安も悪い国ゆえ、さぞかしごっつい男性かと思っておりましたが、お話しを伺ったのは、いずれも若い女性でありとても意外でした。そのうちの一人江上さんは愛知県で高校の教諭をしていたが、若いうちに自分の力を試したくて応募したと動機を語って下さいました。また、ブラジルでは県人会がとても良く生活の面倒をみてくださる事や地方の日本人移住地リアンサ村では昔の日本の生活習慣などの伝統が残っていて皆礼儀正しいことなどを伺いました。お二人の話から次の感想を持ちました。

- ① 日本語教師に求められているのは、文法よりも日本語を通じて日本文化を教えることだ。
- ② 日本語教師は日本語はもちろん、ポルトガル語やブラジルの文化も理解しなくてはならない。教師はブラジルと日本の文化の橋渡しの役割も行っている。

3. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今回の貴重な体験を多くの生徒に伝えるため、富山県高等学校国際教育研究会を通じて報告致したいと思います。また校内ではスライドによる発表や、報告会を予定しております。

この熱が冷めぬよう、授業の中にも取り入れ、さらにその年の新しい情勢も

取り入れながら長く伝えて行きたいと思います。

#### 4. おわりに

日本に着き最初に感じたのは、町中ほとんど日本人だということでした。私はパラグアイに着いてから美人が多いと、キョロキョロしていましたが、それは金髪で、青い目で、グラマーで若い女性を見ていたのです。私の中の外人像はそれを指していました。日本人は外人（欧米人）にはかなわないと思っていた私自身の国際化が遅れていたからです。しかし、この研修を通じ日系人の方々をはじめパラグアイ、ブラジルの色々な人々と交流し、人間としての価値は、人種や国によって決まらない事を学びました。

これから日本には多くの外国人が入国し、私達の隣にも生活されることになるでしょう。その人達に何をしてあげられるのでしょうか、もし、私の身近で外国人が困っていたら、進んで手をさしのべたいと思います。それが JICA の精神にもつながるのではないかと思います。世界の人々と助け合うことが、これからの日本には大事なことだとこの研修を通じ痛感しました。また、海外青年協力隊員の困難にめげず立ち向かっておられる姿に感動致しました。「とても甘いロマンだけではつとまりません。しかし、困難が大きいゆえに、やりがいもある」と彼らは語ってくれました。また彼らが帰国後就職等で、苦勞していると聞きました、このような素晴らしい仕事をやり遂げた人材を、日本の社会の中で生かしていくことは、大切なことではないかと思いました。

帰国後、見学させていただいたアスンシオン市内の養護学校に協力隊員として活躍されている、笹原みどりさんからお葉書をいただきました。それには「もう少し時間があれば、この施設の抱えている問題を見ていただけたと思う。一般の子供でさえ教育環境は悪いのです」と書かれてありました。私達はほんの一部しか見て来なかったのかも知れませんが、しかし、この研修を機会にして今後も関心を持ち続け、これからも生徒に伝えていくことが、今回の研修の意義だったと思いました。

氏 名 秋 山 伸 一

所属学校 岡山県立東岡山工業高等学校

担当教科 社会科(地理)

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- ① 高校で社会科・地理を中心に教えている関係で、訪問する国・地域の国民・住民がどのような人間であり、彼等が地形、気候、風土と係わって、どのような人間活動(農業、工業、住居など)をしているのかを知りたいと思った。
- ② それぞれの国で活躍されている日本人(移住者、専門家、青年海外協力隊員、海外開発青年など)の活動に直面することによって、また日本の援助によって建設されている施設等を見学することによって、日本が行なっている開発途上国への援助の実際に触れることを主眼とした。

## 2. 国際協力の立場で

### (1) 参考になったこと

- ① 「政府開発援助(ODA)」「国際協力事業団(JICA)」「専門家派遣」「青年海外協力隊」「海外開発青年」の言葉には、社会科の教科書や資料集の中にでていた言葉もあり、また載せて欲しい言葉もある。教員である私は、これらについて授業中に生徒に説明をしたりしている。日本人の得意なところか(私も含めて)、本当のところは分かっていないのであるが、これらの言葉の内容を頭だけで理解したつもりでいる。

今回の南米(パラグアイ・ブラジル)への海外研修において参考になったことは、頭で分かったつもりでいた事柄の肉付けができたことである。これによって、今後の授業の中で、教科指導により真実味が出せると思う。

- ② 「地理」教員として農業分野のところで「焼畑」を指導しているが、パラグアイ、ブラジル原生林地帯の開発(それは熱帯地帯の原生林の

開発にも当てはまると思うが)には、この「焼畑」の方法は適していると思う。これしかないのではないかと思った。「焼畑」による森林の開発のし過ぎで、環境の破壊が問題にされているが、これは先進国から言えることであり、当時国からはそのような受け止め方はできないように思う。自分たちが生きていくために必要な「焼畑」ならば、それだけの面積は切り開くであろうから。

(2) 気になったこと

- ① 相手国政府との合意による、日本人移住者の開拓であり、経済協力による自然の開発であるが、日本人の移住者の多くが平均より高い生活レベルになり、相手国の国民の教育レベルが上がってきた時に、日本人に対する反感のようなものが出てくるのではなかろうか。経済協力とか開発は、あくまで相手国の国民生活の向上に結び付いたものでなくてはならない。反感をかうものであってはならない。

3. 我国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

- ① 全国協加盟校の教師を海外に派遣して下さるこのような機会は、是非とも今後も続けていただきたい。派遣人数が総数としては毎年ほぼ同じのようですが、東南アジア方面の人数を減らし(この方面に出かける機会が結構ありますから)、経費のことが当然問題になりましょうが、アフリカ方面も企画された方がいいと思う。実現されても、私には参加の資格がなくなりましたが。
- ② 中学校、高校とも社会科の中で、「世界の中の日本」「国際社会における日本」「世界における日本の役割」などの項目が多々ある。これらのところで授業をする際、我国の協力ぶりを紹介する場面は多い。もはやなされているのではないかと思われるが、「このような主旨で我国の協力ぶりを授業の中で展開していただきたい」と依頼され、そのための資料を各校教科主任に送付されたらいいのではないか。社会科教員すべてが開発教育に熱心ではないでしょうが、教科の関係上からも一人や二人は熱心な方がかならずおられるはずである。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- ① 地理授業の中で外国を紹介する場面があるが、その際写真なりスライドなりが利用できる、また、実際を見学しているので、その説明にも真実味が出せる。
- ② JICA の紹介も兼ねて、日本が実際に行なっている経済協力について授業やその他の機会（文化祭での発表など）を通じて説明しようと考えている。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

率直に言って、8月31日に帰国するのは避けていただきたかった。救いは9月1日が日曜日であったことである。期間についてはブラジルでの研修内容の関係で、あと2、3日あっても良かったのではとの気持ちがある。

##### (2) 研修日程および訪問先

全体を通じて、非常に様々のポイントを沢山見せてくださり、このことに対して、とても感謝している。正直この気持ち为本音である。しかし一方で、やはり肉体的にきついスケジュールであったとも思う。

訪問先は、JICA の関係の所々であることは当然としても、パラグアイ人の普通か低いレベルの民家を訪ねて見たかった。短時間ではあったが、案内の方をお願いして、突然に訪ねたアスンシオン郊外のある農家は印象的であった。

いろんな場面で活躍されている人にお会いでき、そしていろんな施設を見学させていただけたこと、実に満足している。

個人的要望になろうが、アマゾン川流域（マナオス）に行ってみたかった。

##### (3) その他全般的な所感

これは私個人の反省になるが、事前の日程表から各訪問先をよく検討し、準備していくものと考えておけば良かったと思った。全体を通じてかな

り考えたつもりではあったが、学校などを訪ねた時の子供たちへのプレゼントなど。

最後に、訪問先の位置を地図上で事前に打ち合わせする必要があった。

車を走らせている時、市内のどこを走っているか分からぬ時がしばしばあったから。



氏 名 兼 田 公 敬

所属学校 大分県立佐伯鶴岡高等学校

担当教科 農業(野菜園芸)

## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

「我国の農業をとりまく環境は、日に日に厳しさを増し、日本の農業は今、大きな曲り角にきている。」という挨拶は、どの農業関係の会議に出席しても聞く言葉である。30年前、私が農業高校の教師になって以来、常に言われ続けて来たような気がする。

政治家も役人も教師も、また、農業に従事している人達にとっても、日本農業の先行きは全く読めない時代になっている。こうした中で、我々農業高校の教師が、農業を志す生徒を前にして、何を語るか？私はその言葉を知らない。誠につらい毎日である。

「我思う、ゆえに我あり」とまではいかなくても、日本農業を考えるときの基礎、基盤となる「何か」を見いだしたい。外国の農業を見ることによって、「何か」が、かすかたでも見えるのではないか？そんなことを期待して、今回の海外研修に臨みました。

JICAの狙いとは、大きな隔たりがあることは十分承知しており、大変申し訳の無いことだと思っています。しかし、与えられた仕事(開発教育)については、その目的が達せられるよう努力してまいります。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

- ① 幅広い分野にわたって、きめ細かく、その国の状況にあった援助がなされていることが理解できた。
- ② 日本人によって行われる農業そのものが、外国に対する援助そのものであるということが理解できた。

### (2) 気になったこと

- ① 青年協力隊員は、各家庭に住み込みでなければならないという点から、

それぞれの生活環境にあまりにも大きな差があり過ぎること。(農業関係は特に厳しい)

- ② 日本の援助は永遠に続くものではなく、日本が手を引いた後、それぞれのプロジェクトがどうなっていくかということ。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト

答えは…「全て」である。

ただし、紹介の方法については研究の余地があると思われる。パラグアイで若い協力隊員(農業関係)が「自分達はこんなに苦勞しているのに、新聞は JICA のことを悪し様に報道している。」と大変憤慨しておられた。

この海外研修にマスコミ関係者に同行してもらい、教師の研修ぶりを見てもらうと共に、若い協力隊員の活動ぶりを自分の目で確かめてもらいたい。

また、各県には県立の農業大学(農業実践大学校)があるので、その先生方にも参加していただくと、農業関係の協力隊員の養成・派遣には都合がよいと思われる。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- ① 授業を担当している全クラスに、2 時間程度の講義。
- ② 職員に対する紹介。
- ③ 教職員団体の行う教育研究大会での発表。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

- ① 8 月 16 日～17 日の出発が望ましい。(研修終了後何日かの余裕があれば 2 学期が始まり次第発表ができる)

(2) 研修日程および訪問先

- ① JICA の援助の及ばない地区(地域)の農家を一箇所てよいから見学させてほしい。

(3) その他全般的な所感

今回の研修に参加して感じたことは、日本というのは素晴らしい国であるということである。この素晴らしい国に生まれたことに対して感謝したい気持ちでいっぱいである。

我々はあまりにも不平不満が多すぎるのではないか。もっと他人（他国）のことも思いやる気持ちが必要ではないのか。貧しい人があまりにも多い。

反面、我々が一分一秒を惜しんで働いて得たお金を、まるでザルに水を入れるような事態（例えばブラジル国への援助）にも疑問を感じざるを得ないのである。

今回の研修で、見学先へのお土産を考えないでもなかったが、何がよいのか見当もつかなかった。行ってみて、日本語学校の子供達には、マンガの本が大変喜ばれる事を知った。これならば日本からもって行くことは可能である。

今後の研修にあたり、JICAよりその辺のご示唆があれば、両方に喜ばれるのではなからうか。

最後に、今回の研修にあたり、親身になってお世話、ご指導下さった方々に心より感謝申し上げ、報告と致します。





